

今日の箇所ではイエスがどのような方であるかということが、この福音書の特徴的な表現により示されています。三つの「はっきり言うておく」という導入句で始まるイエスの言葉はその内容において三つの主要なことを語っています。「はっきり言うておく」は、原文を直訳すると「アーメン、アーメン、あなたがたに言う」です。「アーメン」は「まことに」、「偽りなく」、という意味です。私たちは祈りの最後に、「アーメン」と唱えますが、偽りなくその通りです、と祈りを終わらせるのです。「はっきり言うておく」は「これから言うことは大切なことだからよく聞きなさい」、という意味です。一つは「イエスは父なる神と一体である」ということです(19~23節)。19節でイエスが行うことは自分の業ではない、父なる神がすることなのだ、と、次に、父なる神がすることは何でも、イエスもその通りにする、と言っています。イエスは、自分の意思、行為が父なる神と一体であると言っているのです。メシア、神の子等の称号はユダヤ教の枠の中でも理解され、イエスと同一視することはできました。しかしイエスを神と等しい者であるとするのは、著者およびヨハネの共同体の特徴的なイエス理解です。第二には永遠の命を与える方としてのイエスです(24節)。聖書が記す命とは、神さまとつながっている状態のことです。逆に死とは、神さまから切り離された状態ということ、と思います。従って、私たちが肉体的な死を経験していても、神さまとつながっているならば、命は途絶えないのです。逆に肉体的には生きていても、神さまから切り離されているならば、それは死んでいることになる、ということの意味しているのです。イエスにつながる時、私たちは死すべき存在であっても、再び命の中へ入れられる。死から命へと移されるのです。それが聖書の語る永遠の命です。第三には終末論的裁きがイエスに委ねられていることです(25~29節)。25節で、今生きている人もすでに死へ向かって生きていますが、イエスの言葉を信頼する者は、今すでに永遠の命を受けている、とイエスは言っています。

このように、著者は、イエスは父から遣わされた方として、自分から何一つ行うのではなく、ただ父から示されたことだけを行う方であるという文を前後に囲んで、今日の箇所では、イエスが神と等しい者として父なる神の権能を委ねられて行使する方であることを、ヨハネの共同体の人たちおよびユダヤ教などの敵対する人たちや世界に宣言しているのです。